

火と言葉：なぜイラン戦争が文明の運命を決定するのか

タデオ・カステリオーネ

インターナショナリスト 360° 2026 年 3 月 12 日

[Fire and the Word: Why Iran's War Defines the Fate of Civilization – INTERNATIONALIST 360°](#)

要旨 アメリカとイスラエルがイランに仕掛けた戦争は、単なる地政学的衝突ではなく、文明の存続をめぐる闘いだ。西暦 680 年カルバラーで殉教したフセインの精神が現代イランに生きており、イランの抵抗は軍事力ではなく「屈服を拒む文化的・歴史的アイデンティティ」に根ざしている。国連安保理の不公正な決議、棄権したロシア・中国の複雑な立場、イラン大統領ペゼシキアンの原則的な停戦条件などは、イランは降伏ではなく正義と主権の承認を求めている。イランの敗北はグローバル・サウス全体の希望を打ち砕き、米国の対中包囲網を完成させる結果を招く。逆にイランの抵抗は、世界が多極化へ向かうための「時間を稼ぐ防波堤」であり、文明の未来を決定づける戦いだ

本文

西暦 680 年、フセインという名の男は自らの死を覚悟し、カルバラーへと向かって騎行した。彼には 72 人の従者が付き従っていた。その前に立ちはだかるのは、数千の軍勢であった。

今日、爆撃されたテヘランの上空で、同じ精神が再び立ち上がっている。なぜなら、アメリカとイスラエルがイランに対して仕掛けた戦争は、単なる石油や海上輸送路をめぐる戦争ではないからだ。それは、世界におけるある生き方の存続をかけた戦争なのである。



このフセイン（シーア派の伝承によればフサイン・イブン・アリ）は過去の存在ではない。彼は現代イランの意識の中に生き続けている。シーア派ムスリムにとってフセインは「殉教者の主（サイイド・アル＝シュハーダ）」であり、真の勝利とは単に生き延びることではなく、自分が正しいと信じることを最後まで守り続けることであると教えた人物である。カルバラーで戦われたのは軍事的な戦いではなかった。イスラム共同体の中で起きた「本当の指導者とは何か」をめぐる争い、つまり暴政に屈しない正義の側に立つ人物 と、 カリフ（正統な支配者）を名乗りながら実際には圧政を行う勢力 とのあいだの戦いだった。

アメリカとイスラエルがイスラム共和国に対して始めた侵略は、その本質において、680年にフセインが直面したものと大差ない。剣はミサイルに、騎兵は空中を飛翔するドローンに名は変わった。しかし本質は変わらぬままだ。つまり無条件の服従を要求する傲慢な権力と、あらゆる戦略的論理に反して屈服を拒む民衆。

国際法が守られず孤児のように見捨てられる

国連安全保障理事会での最近の投票ほど、現代の国際秩序の腐敗を露呈するものはない。3月11日、国際平和と安全を守るべきこの機関の15カ国中13カ国が、バーレーンが起草した決議を承認した。その決議は「イラン・イスラム共和国によるバーレーン、クウェート、オマーン、カタール、サウジアラビア、アラブ首長国連邦、ヨルダンの領土に対する露骨な攻撃を強く非難する」と明記している。そしてテヘランに対し即時攻撃停止を要求し、ホルムズ海峡

の航行妨害行為を非難している。しかし 135 語に及ぶ非難を続けながら、2 月 28 日以降に数千人のイラン人を虐殺し、最高指導者アリ・ハメネイを暗殺し、イラン指導部の重要人物数名を殺害した米・イスラエルの爆撃については、一言も言及されていない。

その偽善は甚だしく、もはや隠そうともしない。13 カ国は、あたかも戦争が突如始まったかのように、あたかもイランがある朝目覚めて何の挑発もなく隣国へミサイルを発射すると決めたかのように投票した。この決議は、まるで別の現実を作り出している。そこでは加害者が見えなくなり、被害者がいつの間にか“加害者扱い”されている。

ロシアと中国の棄権

特筆すべきは、ロシアと中国が棄権したことである。拒否権を行使しなかったとはいえ、少なくとも茶番劇に加担しないという最低限の良識は示した。中国代表の傅炎は北京の立場を明確に説明した。「米国とイスラエルは承認を得ず、交渉の最中にイランへの攻撃を開始した。これは国連憲章違反である。この紛争には正当性も法的根拠もない」

ロシアのヴァシリー・ネベンジア大使はさらに辛辣に、「この決議を読めば、イランが理由もなく攻撃したと誰もが考えるだろう。真の侵略者は文面から除外されている。そして安全保障理事会はこれをまさに承認してしまった」と述べた。

国連での採決でロシアと中国が棄権したことを、関心がないとか、わざと無関心を装っているとみなすべきではない。その本質を見極めるべきだ。これは、単なる棄権ではなく、ロシアと中国というユーラシアの二大国が、それぞれ自分たちの戦いに縛られて身動きが取れない状況にあるという現実を示していると理解すべきだ。ロシアはウクライナ戦争に、中国は「技術覇権をめぐる生存をかけた競争」に追われており、いまワシントンと正面衝突すれば、自ら戦略的破滅を招くだけなのだ。

彼らがイランを見捨てたと結論づけるのは、あまりに単純すぎる。彼らは表立っては何もいわないが、情報、防衛、技術、核の分野で確かに支えている。そして最も重要なことは、両国ともイランの抵抗こそがいま一番役に立つ力だということがわかっている点である。

ペゼシュキアンの計算と抵抗の性質

嵐のような状況の中で、イランのマソウド・ペゼシュキアン大統領は先をみて慎重に停戦の条件を整えた。ロシアとパキスタンの政府首脳と接触したペゼシュキアン大統領は「イスラエルとアメリカの挑発によって始まったこの戦争を終わらせる唯一の道は、イランの正当な権利を認め、賠償を支払い、そして今後いかなる侵略も行わないという国際的な義務を確立することだ」とのべた。」

この方程式の知性を見よ。ペゼシュキアンは軍事的勝利を求めている（敵の核能力と指導者の愚かさを承知の上で）。敵軍の無条件撤退を要求しているわけでもない。彼が本質的に提案しているのは、国連がまさに踏みにじった国際法の正当性の回復である。すなわち、イランが正当な権利を有すること、侵略行為は是正されねばならないこと、そして再発防止の信頼できる保証が不可欠であること。これこそが真の平和構築の三本柱であり、安全保障理事会が一方的な非難決議を発した際に否定したまさにその要素なのである。

しかしペゼシュキアン大統領のメッセージにはさらに深い次元がある。つまり、このような明確な条件を提示することで、イラン大統領は世界にこう告げているのだ。

我々は戦争を望まないが、降伏も受け入れない。交渉には応じるが、屈服はしない。

私それは、カルバラーにおいてフセインが体現したのと同じ態度である。ヤズィードへの忠誠を誓うよう要求された時、彼はこう答えたのだ。「奴隷のように屈服することは決してない」と。

この言葉は、いまの状況を考えると背筋が寒くなるほど現実味を帯びている。なぜなら、アメリカとイスラエルがイランに求めているのは、核計画の調整や一時的な譲歩ではないからだ。元米軍中将マイケル・フリンが露骨に語ったように、それは「どんな政権が灰の中から現れようとも、アメリカがその新しいイラン政権と前向きな関係を築けるようにするための政権交代」であり、その最終目的は中国を弱体化させることにある。つまり彼らが求めているのは、イランの“存在そのものの降伏”、主権の放棄、歴史の抹消なのだ。

そして、まさにここでペゼシュキアンの計算とフセインの精神とが重なりあうのである。

なぜなら、何世紀ものあいだ大国の狭間で自分たちのアイデンティティを守ってきた国は、「絶対に越えてはならない一線」があることを知っているからだ。屈辱を受け入れるということは、一度きりの代償ではなく、終わりのない罰になる。そのことをよく理解しているのだ。

イランは理解している。外務省のエスマイル・バーガイー報道官が率直に語ったように、「この国の地図は、すべてのイラン人が誇りに思い、命をかけて守ろうとするものすべてを表している」のだ。

なぜイランは打ち負かすことはできないのか

西側の軍事戦略家たちが答えられない疑問が一つある。数十年にわたる制裁、標的型暗殺、組織的な妨害工作、そして今や政治的・宗教的指導部を壊滅させた開戦状態に晒されながらも、なぜイランはなおも存続しているのか。最高指導者、複数の革命防衛隊司令官、そして数百人の科学者・技術者を失った国が、どうして地域内の米軍基地に対しミサイルやドローンの攻撃を続けられるのか。

答えは兵器庫や軍事技術にあるのではない。ペンタゴンの教本では決して説明できないもの、すなわち「抵抗をみずからの本質としてきた文化の歴史の厚み

にある。アケメネス朝時代の「万人の不滅者」から 1980 年代のイラン・イラク戦争の戦士たち、そしてカルバラーの叙事詩に至るまで、イランは“死と殉教”を特別な意味を持つものとして受け止めてきた。その感覚を、西側は理解することができない。

この意味で、イランが「崩壊寸前だ」という主張は、紛争の実態よりもむしろ、その侵略者たちの幻想を露呈している。今日テヘランの差し迫った崩壊を予測する者たちは、何年も前に制裁が体制を崩壊させると予言し、国内の抗議活動が政権を倒すと断言し、国際的な孤立がそれを窒息させると主張したのと同じ連中である。それにもかかわらず、イランはなおも存続し、抵抗し、適応し、包囲網の隙間を見つけ、ロシアや中国との代替同盟を構築し、独自の防衛産業を発展させている。

7 世紀のアラブ侵攻から 1980 年から 1989 年にかけてイラクに強要された戦争に至るイランの歴史は、帝国を生き延びる術を学んだ民衆の物語である。イスラム征服から 14 世紀を経た今もペルシア語は話され、イラン文化はイスラム世界における試金石であり続けている。殉教と正義を重んじるシーア派は、今なお人々を奮起させる力だ。これら全てが数発の爆弾で消え去ると考えるのは、米国をベトナムからアフガニスタンへ、イラクからシリアへと敗北から敗北へと導いた傲慢さそのものである。

イランに写しだされるグローバル・サウス

この戦争が他の西アジアの無数の紛争と決定的に違うのは、その“文明的な意味”にある。争っているのは、どの領土を誰が支配するか、どのパイプラインを誰が握るか、といった問題だけではない。一極支配の世界秩序が崩れつつある今、“これからの世界が、主権が尊重される世界になるのか、それとも力の強い国が何の制約もなく他国に自分の意志を押しつける世界になるのか”という根本的な問いがかかっているのだ。

イランが今日戦っているのは、イランだけの戦いではない。それは、帝國的傲慢に対抗する“グローバル・サウス全体の戦い”でもある

それは、記憶にないほどの激しい包囲に晒された中規模の国が、超大国とその主要な地域同盟国に屈服することなく立ち向かえることを示している。そしてそうすることで、主権を渴望する全ての民衆にメッセージを送り続けている——帝国は無敵ではない、尊厳には代償が伴うが報いもある、そして降伏が唯一の選択肢であることは決してない、と。

しかし、だからといってロシアや中国を軽率に批判すべきではない。モスクワや北京の“曖昧さ”をすぐに責め立てる人々は、あまりに単純化された視点に立っている。彼らは基本的な事実を忘れているのだ。ロシアも中国も、何百万もの駒が動く巨大なチェス盤の上で戦略を組み立てており、その計算はイランとの二国間関係をはるかに超える複雑さを持っている。

援助は目に見える形でなければ効果がないとは限らない。ロシアはウクライナで NATO に対する自らの存亡をかけた戦争を繰り広げているにもかかわらず、テヘランとの間で複数の分野にまたがる静かな戦略的協力を維持している。情報共有、防空、技術移転、そして何よりも核・科学分野における支援は、西側の目には不透明であるほどに極めて重要だ。

中国もまた、この地域で自国にとって極めて重要な利害 とくに湾岸諸国との関係を 抱えており、独自のカードを切っている。しかしそれでも、中国は多国間の場において、少なくともイラン非難を避ける立場を維持している。その結果、ワシントンが求める（イラン非難の）“国際的な正当性”を与えないままである。

すべての連帯が見出しに表れるわけではなく、ユーラシアの大国たちの地政学はツイートや大げさな宣言で決まるものではない。素人の目には生ぬるく映る支援も、実際にはニュースサイクルではなく数世紀という尺度で測ったときにこそ、その真の姿を見せるのである。

キャンセル文化への反発

この戦争には、特に考察すべき側面がある。すなわち文化的次元である。米イスラエルの爆撃が軍事施設だけでなく、イランのアイデンティティにとって深

い象徴的価値を持つ場所をも標的にしたのは偶然ではない。最高指導者が暗殺されたのも偶然ではない。トランプの脅しに、あたかも不動産取引の土地のようにイランの国境を書き換える話が含まれているのも偶然ではない。

最終的に問われているのは、アングロ・サクソン型のグローバル化という“均質化のつぼ”の中に溶かされることを拒む、ひとつの文明的経験が生き残れるかどうかだ。イランは、良くも悪くも、“西洋とは異なる近代” 自らの文化的・宗教的根を捨てることなく、技術的・科学的発展を遂げるという可能性を体現している。だがこの可能性は、支配的なイデオロギーにとっては“異端”である。そのイデオロギーは、未来へ至る道はただ一つ、ワシントン、ロンドン、そしてテルアビブを通る道しかないと考えているからだ。

我々が論じてきた「キャンセル・カルチャー」とは、型にはまらない歴史的経験を消し去ろうとする試みに他ならない。不都合な像が不可能なイデオロギー的純潔の名のもとに引き倒されるように、何世紀にもわたり抵抗してきた文明の背骨を折るためテヘランは爆撃される。しかしペンタゴンの戦略家たちが理解していないのは、文化は爆弾で滅ぼせないということだ。文化は変容し、適応し、後退する。だが決して消え去ることはない。

文明の未来

この時点で率直に問わねばならない。もしイランが陥落したらどうなるか。唯一、公然と一極支配体制に挑戦する勇気を持った地域大国が敗北することは、グローバル・サウスにとって何を意味するのか。

その結果は壊滅的であり、イラン人だけに限ったことではない。

イランの敗北は、主権を志向する全ての民族に恐るべきメッセージを送るだろう。帝国は常に勝利し、抵抗は無益であり、唯一の賢明な道は可能な限り有利な条件で降伏交渉することだ。抵抗軸は崩壊し、ヒ

ズボラは孤立し、ハマスは殲滅され、フーシ派は主要な支援を失う。そしてイランが屈服すれば、ワシントンは全ての資源を真の標的である中国に集中させられる。

マイケル・フリン退役中将はためらいなくこう述べた。「我々はイスラエルに任務を完遂させる必要がある。それが達成されれば——時間はかかるだろうが——米国は完全に中国に集中できるようになる。我々は21世紀の主要な敵対勢力、すなわち中国に焦点を当てねばならない」と。イランとの戦争は、米国の戦略的観点からすれば目的そのものではない。北京包囲網を完成させ、中国から重要なエネルギー供給パートナーを奪い、アジアの同盟国に対し米国の抑止力が依然として有効であることを示すための必要不可欠な段階なのである。

イランは自国のためだけに戦っているのではない。多くの声、多くの物語、そして人生や政治を理解する多様な方法が共存し得る世界のために戦っているのだ。唯一の道、唯一の真実、社会を組織する方法はただ一つしかにという概念と戦っている。究極的には、世界の多様性のために、押しつぶされることなく異なるままである権利のために戦っているのだ。

従来 of 地政学的分析が認めようとしなない不快な真実がある。イランが陥落すれば、次の段階への道筋は明らかだ。ワシントンはテヘランで止まらない。イランが屈服すれば、ロシアと中国を締め上げる縄は窒息寸前まで引き締まるだろう。

ウクライナ紛争に直面するモスクワは、コーカサスと中央アジアにおける戦略的同盟国を失えば戦線が拡大するだろう。北京は主要なエネルギーパートナーを失い、米国の抑止力の信頼性が高まるのを目の当たりにしながら、選択肢が劇的に狭まるシナリオに直面する。弱みのある立場での交渉、余地が狭まる中でますます息詰まる封鎖に耐えるか、あるいは誰も口にしながらないレベルまでエスカレートする可能性のある直接対決のリスクを負うかのいずれかである。

これこそが、いまイランで問われているものの本当の意味だ。私たちが主張してきたように、これは“ペルシャの国と西側連合の遠い戦争”などではない。ここは、人類が“破滅へ向かう止められない螺旋”に入るのか、それとも逆に、帝国の攻勢を食い止める“裂け目”時間の窓、ひとときの猶予　　が開くのが決まる最前線なのだ。

逆説的に聞こえるかもしれないが、いま衝突が核保有国同士の“後戻りできない全面对決”へとエスカレートするのを防いでいるのは、実はイランの抵抗なのだ。イランが放つ一発一発のミサイル、イランが踏みとどまる一日一日、そしてアメリカに兵器を消耗させる破壊された施設の一つ一つが、ロシアと中国にとっては“再編し、防衛を固め、代替策を構築するための時間”を稼いでいる。

この観点からすれば、イランでの戦争は避けられない災厄ではない。より大きな災厄を抑えるために支払われる代償なのだ。そしてその塹壕の中で、イラン人たちが戦っているのは祖国のためだけではない。彼らが戦っているのは、多極化世界——我々が分析で頻繁に言及するあの世界——が空想ではなく、実現可能な地平となる可能性のためだ。彼らが戦っているのは、未来があるために戦っているのだ。

カルバラーの教訓

シーア派の伝承によれば、フセインはカルバラーへ向かう前に、従者たちに向けた演説を行った。彼は、留まりたい者は留まるようにと告げ、誰にも無理に同行させるつもりはないと述べた。そして、世紀を超えて不朽の名言となった言葉を付け加えた。

死は避けられず、死後の命は永遠である。この旅に同行する者は皆、我々の報いを分かち合う。取り残される者も、非難されることはない。

フセインは自分が死ぬことを知っていた。ヤズィードの軍勢に比べれば自軍が無力であることも、軍事的には最初から敗北が決まっていたことも理解していた。しかし彼は同時に、犠牲者や領土で測れない勝利があることも知っていた。フセインの勝利とは、十四世紀にわたって芽吹く尊厳の種を蒔くことだった。フセインの勝利とは、真実が真実であるために必ずしも勝利する必要はないことを示すことだった。

今日、テヘランの街角で、コムのもスクで、イスファハンの仮設病院で、何千人ものイラン人が、おそらく無自覚に、同じ論理を体現している。彼らはミサイルが今も降り注いでいることを知っている。指導者たちが倒れたことを知っている。世界が目を背けていることを知っている。しかし彼らは同時に、降伏が選択肢ではないことも知っている。勝利が約束されているからではなく、勝利よりも重要なものがあるからだ。

カルバラの塵の上、テヘランの爆撃が遺した廃墟の上、グローバル・サウスの良心の上になお残り続ける問いがある。それは、世界はこの危機に立ち向かうかどうかである。時が来た時、イランの後を継ぎ、彼がいったように「奴隷のように屈服しない」と声をあげる者たちが現れるのか。我々が地政学的分析で繰り返し語ってきた人類の文明的未来は、尊厳を分かち合う未来となるのか、それとも形を変えただけの古い支配の再演にすぎないのか。

イランは今まさにその戦いを戦っている。その結果は西アジアの地図だけでなく、来るべき世界の魂をも決定づけるだろう。

「諸国民の門」パサルガダ（ペルセポリス）にて。

タデオ・カステリオーネ – PIA グローバル編集長 – 国際関係・紛争分析の専門家、RT 認定国際ジャーナリスト、トムスク国立大学ロシア史・ロシア歴史地理学専攻卒業。

【翻訳チェック 田中靖宏】